

忍者のはなし

藤 沢 毅

はじめに

みなさんは「忍者」にどのようなイメージをお持ちですか？ 黒装束に身を包み、手裏剣を飛ばし、闇を走る？ あるいは、印を結んでドロンと消える？ 海外では現在でも日本に忍者がいると信じている人がいるそうです。現代の我々は、例えば山田風太郎の小説、白戸三平の漫画、藤子不二雄の『忍者ハットリくん』、尼子騷兵衛の『落第忍者乱太郎』などから、それぞれの忍者のイメージを持っているのではないのでしょうか？

それでは、江戸時代に、忍者はどのようなイメージで捉えられていたのでしょうか。文学作品の中から読み取ってみましょう。

I 「仮名草子」「浮世草子」の中の忍者
仮名草子というジャンルの中の怪談集『伽婢子』（寛文六年（一六六六）刊）には、有名な「飛加藤」という忍者が登場します（注1）（巻七・三）。

越後の国長尾謙信は、春日山の城にありて、武威を遠近にかがやかし給ひける所に、常陸の国秋津郡より、名誉の窃盗しのびのもの来れり。しかも術品玉に妙を得て、人の目をおどろかす。

ある時、さまざまの幻術をいたしける中に、ひとつの牛を場中にひき出し、かの術師これを見侍べり。一座の見物きもをけし、きどくの事にいひけるを、その場のかたはらなる松の木

にのぼりて見たるものありて、「ただ今牛をのみたりとみえしは、牛のせなかにのり侍べり」とよばはるに、術師はらをたて、その場にて夕顔をつくる。二葉より漸々に蔓はびこり、扇にてあふぎければ花咲出つつ、たちまちに実なりけり。諸人かさなりあつまり、足をつまだてて見るうちに、かの夕がほ二尺ばかりになりけるを、術師小刀をもつて夕顔の帯ほぞを切れば、松の木にのぼりて見たるものくび切落されて死けり。諸人きどくの中にあやしみをなし、眉をひそめたり。

「窃盗」という漢字が使用されているように、「窃ひそかに盗む」ことをなす人物を指して「しのび」と呼んでいます。品玉というのは、玉や刃物を空中に投げ上げ、手玉に取ること、あるいは転じて手品のよくなものを指します。これだけでも素早い動きによって人の眼を幻惑させる技術を持っていたことが想像できるのですが、その上さらに、現実離れた幻想を使うこともできたようです。ここでは、見物人に牛を呑みこんでいるかのように見せる術、夕顔を瞬時に作り、その帯（「へた」のこと）を切ると

見せて人の首を切っているという術を見せています。

この後、謙信の前で、「幻術の事は底をきはめて得たり。手に一尺の刀をもちては、いかなる堀塀をも飛こし、城中にしのび入に、人さらにしらず」と言い、その言葉を証明するために、直江山城守の家から長刀を盗んでくるよう命じられます。飛加藤は、まず犬を毒で殺し、垣を乗り越え屋敷に入り、長刀だけでなく女の子一人をも盗んで帰ってくるのです。この時、番の者は「半ななばねぶりてしらず」「ねぶるとはなしに、すこしもしらず」という状態。盗まれた女の子も「ふかくねぶりて、これをおぼえず」という状態でした。

しかし謙信は、このような危険な者を身近に置くのはよろしくないと考え、加藤を殺そうとします。加藤はそれを察し、幻術を見せ、逃げてしまいました。この後、加藤は武田信玄のもとに仕えようとなりましたが、結局密かに殺されてしまうと記されています。

一尺の刀を持てば、どのような堀や塀も飛び越えるというのは、身の軽さと強い筋力も意味しております。しかし、長刀と女の子を盗んでくる際に

は、番の者も女の子も眠ってしまっています。ここにも幻術に近い、人を眠らせる術が使用されているようです。しかし、ついでは言え、女の子を盗んでくるというのは、危ない嗜好を想像させますねえ。課題以上のことをなした加藤ですが、謙信は危険と見て殺そうとします。結局は、後に仕えようとした信玄に殺されるという結末が描かれます。戦国大名にとって、力は認めるものの、自らの身の危険性を鑑みると家臣にはできなかったということでしょう。これは、「窃盗のもの」には、忠義心がないとの判断でしょうか。

次に提示しますのは、浮世草子『新可笑記』（元禄元年≒一六八八≒刊）に収録される「槍を引く鼠の行方」（巻五・一）です。

古代、関東のうちに高名の家あり。子孫の末に伝えて武の道はげみ給ひしに、**忍び**調練の侍十人申合せ、此家に御奉公を望みぬ。

（中略・書院に甲を置き、それを取る^{こと}ができた^ら召し抱える^{こと}とする）

随分気をつけ、大書院の長床に甲立をかざり、

大納戸衆八人居ならび、大横目兩人中程に逆座して、書院の入口を改め、其一間ぎりに出入をやめて此御番を勤めしに、夜の明がたに自然と、いづれ眼は常にして心の眠りきざしぬ。やうやう人貌も見えし時、甲立ばかり残りて、各おどるき、「通力なればとて、是程の諸役人の眼前にて、かかるふしぎを見する事、自然の時の御用にたち、いかなる事も是にて利を得る重宝」と、此評判のとをり言上申処へ、はや忍びの者、未明にかの甲をさしあげける。

（中略・当日不在であった家老がもう一度、自分のもとから武道具を持ち出せと命ずる）

四つ半時の時計を聞に、鼠三疋友つれて、くらがりまぎれにはしりゆく。それにはかまはず勝手にたち、逸物の猫を気をつけ見られしに、髭もうごかずゆたかにふしける。いそぎ本座に立帰り、しばし心をすますに、最前のねずみ又かけいでしを、あとよりしたひゆくに、次第其かたち大になりて、犬に見ます程の時、とびかかつて、「我猫の性なり」といへるに、此一言、かたちに応じて位をとられ、さすがのしのび男あらはれける。

これも武家の家に奉公を望んだ「忍び訓練の侍」が、甲を盗み出すという課題を出され見事にこなすが、次に家老のもとから武道具を盗み出す課題に對しては、家老の知恵に正体を顕されてしまうという話です。甲を盗む際には、やはり番の者は「心の眠りきざしぬ」という状態にさせられているので、これも一種の術なのでしょう。武道具の際はもつと手がこんでいます。家老の目からは鼠が走っていったと見えたのですが、傍の猫を見ても鼠に反応を示しません。そのため、その鼠が怪しいと考え、跡をつけたところ、鼠が犬ほどの大きさに変化していきました。そこで「我猫の性なり（私は猫の性質を持っている）」と言ったところ、その言葉によって鼠に化けた男たちは位負けし、正体を顕してしまったというわけです。

「我猫の性なり」という台詞に反応してしまうというのも変な話ですが、さらにおもしろいのは、この話には挿絵がついておりまして（図1）、この挿絵では下半身鼠の状態である男たちが描かれているのです。術が半分解けたところで家老に見顕され、持ち出した鎗を取り返されようとしているのでしょうか

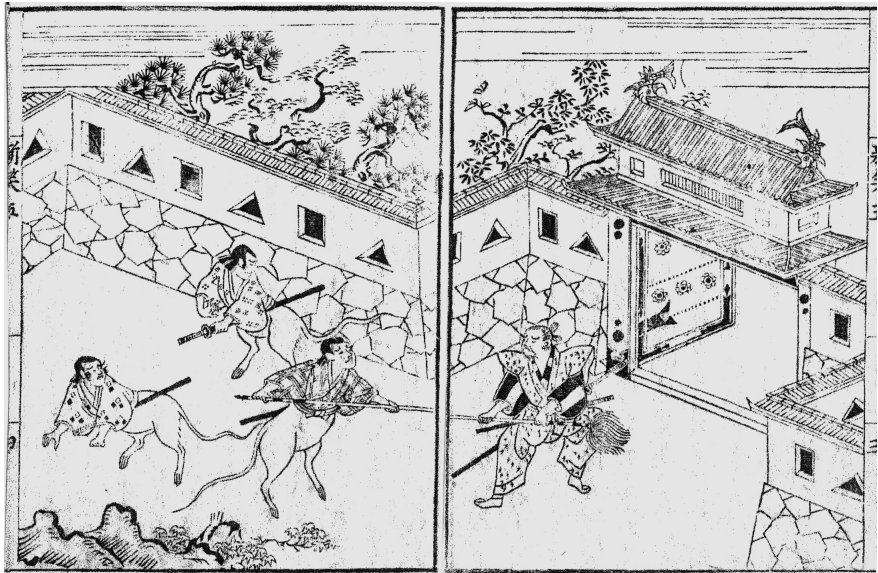


図1 『新可笑記』「槍を引く鼠の行方」挿絵

か、あるいはその鎗で反撃を試みているのでしようか。どちらにしても、下半身鼠のままの姿はなんとも不自由そうですね。

この後、その家老は主君にむかって「当年代々御手柄世にかくれなし。先君親殿にもおくれさせ給へる御器量共ぞんじ奉らず。此以後、軍法の方便てだて、武士の正道にて勝事かつか得るとも、御内に忍しのびのものありて、世とは各別の表裏うらひと、此さたせられては、高名の御家わづかの事にすたるなれば、この者ども残らず御いとま」と申し上げ、取り入れられることになりました。家に忍びの者がいるということが世間に沙汰されては、武士の家として不名誉であり、お家衰退の基となるという理由で、結局「忍しのび調練の侍」たちの仕官は認められないこととなります。その力、有効性は認められるものの、忍しのびの術は「武士の正道」とは異なるものであるとの見解が示されているのです。忍しのびの術に対する軽蔑が見てとれますね。

飛加藤の場合も、鼠に化ける術を使った者の場合も、その目的は戦国大名に、あるいは高名なる武家に仕えようとして、自ら修得している忍しのびの術を使っています。後者の場合も時代設定を「古代」と曖昧にしていますが、戦の絶え間なくある不安定

な時代を想像できません。戦国の世に、忍しのびの術を持った者が仕官を望むという形は、江戸時代の読者にとつてリアリティを持っていたものなのでしょう。この忍しのびの術は、人を眠らせるような状態にしておいて、物を盗み出すという働きを見せました。しかし、いずれもその有効性は認められるものの、忍しのびの術は正道ではないという意識、それを使うものには武士道的忠義心の存在を疑われ、結局は仕官が叶わないこととなったのです。

この二例のみを以て、江戸時代前期の散文における忍者のイメージを断定するのは無理がありましよう。しかし、後世にも残る『伽婢子』や『新可笑記』にこれらの話が載ったということは、そのイメージが読者に定着していく働きを持ったこともまた否定できないはずです。

II 「実録」「読本」の中の忍者

今度は、江戸時代中期から後期に（実際には幕末、明治初期にも）盛んに作られ、読まれた実録や読本の中に描かれた忍者を見てみましょう。

まずは実録『賊禁秘誠談』（江戸中期には成立。

実録というジャンルの文学は、写本で流通し、新しい写本が作られるたびに本文の変遷も伴います。ゆえに、テキスト毎に内容が違ふと言つてもよいでしょう）に登場する忍者・石川五右衛門（様子）です。石川五右衛門というと、忍者というよりも「大泥棒」というイメージが現代の我々にはあるのではないのでしょうか。アニメで有名な「ルパン三世」に、十三代目石川五右衛門がルパンの仲間として登場しているのも、その意識に拍車をかけていますね。しかし、江戸時代の石川五右衛門は、まず忍びの術を持つていることに特徴があるのです。

伊賀に住む石川文吾（後の五右衛門）は、伊賀浪人である郷士の百地三太夫の弟子になります。この百地三太夫が忍びの術を修得していたのです。

其頃、百地三太夫といふ郷士有り。彼は元来、伊賀浪人にて、武術を嗜み、その上忍の術を得て妙を得たり。

（中略・花山院大納言家にて、「柴船」という名前の名香が盗まれ、三太夫はその捜査を頼まれる。三太夫は、家来の中に犯人がいると推測し、「夜な夜な忍び伺いける」ところ、一人の

家来が隠し持っていたのを見出す）

石川文吾は十七才にて元服し、百地が同村に住居し、近所なれば、百地が宅へ万事頼みに依りて、三太夫も、父母もなきみなし子の文吾なれば、心よく呑みこみ、則ち、弟子となして諸芸を教えるに、別して忍の術には生まれつきにや、稽古よりも勝りて、三太夫も「早くも我道を継ぐべき者也」と氣に入りて、秘密口伝をおしえ、第一の門弟となしける。

（中略・三太夫が妾に夢中になつてゐる間に、文吾は三太夫の本妻と密通する。妾は、そのことに気づき、文吾と本妻が密通している場に乗り込むが、文吾の姿はない。本妻は『扱は夫・三太夫が教えし忍びの術を以て、姿を隠し給ふと見えたり』と安心する）

『いづくに忍びおわするや。但しは帰られしや』と案じ詫びたるに、思ひもよらず夜具長持の内より、文吾、すつと出、「嗚々、御心遣い。しかしながら、百万にて取巻とも、覚え得し術を以て隠るる事、易し」と…。

百地三太夫は、その忍びの術を、名香を盗んだ犯

人を捜すために使いました。容疑のかかる家臣一人一人の居宅に忍び、盗まれた名香がないか捜したのです。家人に気づかれずに忍び入り、捜査をしたわけですね。この術を受け継ぐのが後に五右衛門となる文吾なのですが、文吾はその術を密通が露頭しうになつた時に身を隠すということに使用しました。その際には夜具長持の中に忍んだようですが、まるで隠れんぼのようですね。

「忍ぶ」とは、この場合、人に気づかれないということであり、家人を眠らせるなどの術はなくても、自らの身を隠す、あるいは隠しながら行動ができるという技術なのでしょう。これはやはり盗みに入るということにも応用ができます。文吾あらため五右衛門は三太夫の家を出、盗賊の頭となつていきました。やがて、五右衛門は忍術の弟子であつた木村常陸助の紹介で豊臣秀次に会い、秀吉の持つ術ちとせりの香炉を盗み出すよう依頼を受けます。

：（秀吉は）御油断なく、寝ずの番も人を増し、究竟の侍ども寝ずの頭に仰せつけられ、替わり替わり昼夜相詰めける。其夜は名にあふ仙石権兵衛、寝ずの頭として二十八人、御居間を守護

し、眼を配り扣へたり。不敵の五右衛門、安々と御殿に忍び入り、御次の前へ来りけれども、仙石を始め、番人は是を知らず。（中略）差し足、抜き足にて、次の間には仙石を始め、あまた寝ずの番、いかなることにや眠きざし、前後を失ひ、曲者を知らず、畳にひれ伏し、襖にもたれ、正体なし。番人の中を身をひそめ通りしが、誤つて仙石権兵衛が足の指を踏付ける。（以下略）仙石権兵衛始め、多くの侍を相手に闘う五右衛門であつたが、最後は薄田隼人に目つぶしの灰を投げつけられ、取り抑えられてしまう）

ここでは、単に番の者たちに気づかれないように忍び入るだけではなく、いかなる術をつかつたのか不明ですが、番の者たちを眠らせるという力を發揮しています。しかし、眠っている番人のうちの仙石権兵衛の足の指を踏みつけてしまうという、むしろ初歩的なミスを犯してしまい、それが元で五右衛門は捕縛されてしまうこととなります。最初に紹介した飛加藤や鼠に化ける術を使った者と同様に、人を眠らせる術を使用するのは、特に用心して番をしている家から何かを盗み出すためには必要なものでしよ

う。盗みのために使用する忍術には欠かせないものなのかもしれません。

参考までに、石川五右衛門が歌舞伎『艶競 石川染』(寛政八年(一七九六)初演)の中でどのような描かれているか、ご紹介しましょう。

(石川五右衛門は、明智光秀の家臣である四王天但馬守の子。ある日、父の遺した伊賀流忍術の巻物を見つける)

「スリヤ、この一卷を肌につけ、草臥の法を行へば、我が形を隠し、人の目を暗ます事、彼の神代の巻に記したる、隠れ蓑にも優りしと云ふ忍術の極意。ムウン」

(五右衛門は術を使い、筒井順慶、小田弾正の手から千鳥の香炉を奪い取る)

順慶「シテ、千鳥の香炉は」

弾正「即ちこれに」

ト香炉を出す。五右衛門、思ひ入れあつて、忍術の巻物を出し、口の中にて秘文を唱へ、戴いて懐中し、真中へ出る。兩人、五右衛門が目にかからぬこなしにて、

「イザ、お渡し申さう」

ト差出す。五右衛門、引つたくり懐中する。

順慶驚き、

「南無三、香炉を」

トうろろうろする。

弾正「如何いたした」

順慶「何者やら引つたくりました」

弾正「何を馬鹿な。何者も人が居らぬが」

順慶「でも、引つたくりました」

弾正「スリヤ、香炉を」

兩人「ハテ、面妖な」

ト五右衛門、兩人が顔を見て、我も不思議なと云ふこなしにて、香炉をちよつと出して見せる。兩人見付けて、

「さてこそ」

ト取ろうとする。五右衛門、ちやつと懐へ入れて、兩人、飛び退く。キツと反り打つて擬勢。

五右衛門、兩人を見て、せせら笑ふ。

「忍術の巻物」という秘密道具アヒダケを身につけ、秘文を唱えるという行為によって、姿が見えなくなるといふのです。忍術が修行によって習得する技術では

なくなっています。これは、歌舞伎の舞台の上では、その方が効果的であるからでしょう。天草四郎（歌舞伎では「七草四郎」などと命名されます）や天竺徳兵衛などの使う妖術に近いですね。

次に読本に描かれた忍者を見てみます。栗杖亭鬼卯作の読本『新編陽炎之巻』（文化五年（一八〇八）刊）は、忍術の巻物「陽炎の巻」を巡つての敵討ち譚（たん）です。忍術の達人近藤刑部には息子の志津馬がいますが、志津馬は忍術を「邪法に近きもの也」と言つて軽蔑しています。しかし、ふとしたきっかけから隣家の余光姫に恋をし、そこへ忍んで通うために急に忍術を学ぼうとします。しかし、父の刑部は、

「其方事、幼年より物毎かたくな頑かたくなにして、忍術は邪術なりと先祖までを非法ひぼうし、今又、先祖の事を思ふよし、其心得がたし。併しかし、汝が申如く、大將は謀を帷幕いぼくの内うちにめぐらし、勝事かつを千里の外ほかにすとかや。忍術は小術せうじゆにして大器にあらず。汝、其所を發明して是をを発しと、我甚感心せしに、今又、其小術を学んとは何事ぞや……」

と、かえつて忍術を嫌う息子の考えを誉め、忍術を教えないのです。「邪術」あるいは「小術」である忍術は、大将の遠謀に劣るとの考えが顕れていますね。困つた志津馬は、父の弟子である赤松九郎から秘かに忍術を習い、姫のもとに忍んでいくのですが、密通のための忍術というのも、五右衛門と共通しています（志津馬の場合は未熟な忍術ゆえ、見つかつてしまうという相違点もあります。解放されませんが）。

さて、刑部は、弟子の赤松九郎に忍術「陽炎の巻」を披露し、その慢心を咎めます。その術はというと、桑名の営中に盗みに行つた九郎が、まず白鼠に化け餅を盗もうとするのですが、赤猫が現れ邪魔をしました。次に白猫に化けた九郎が餅を狙うのですが、今度は赤犬が現れ邪魔をします。九郎は結局餅を盗み出すことができず、刑部の元へ戻り結果を報告します。赤猫や赤犬に化して邪魔をしたのは、実は自宅で門人と酒を飲み眠っていた刑部なのでした。人間以外の物に化けることは九郎にもできたのですが、刑部は体を空蟬としてその場所に残り、精神だけで別の場所へ行き、しかも動物に化ずるということを行つたわけです。読本の忍術は、上級なも

のになると非現実的な要素が強くなりました。

この「陽炎の術」は、後に九郎が刑部を殺して奪い、最後は志津馬の味方たちによつて奪い返されるのですが、巻物そのものが術を使う際に不可欠であったようです。具体的にどう働くのかは、まったく書いてないんですけどね。

この読本にはもう一人、刑部の弟子である木村太郎助が、九郎と対抗できる忍術を習得しているのですが、この太郎助が無銭飲食に使う場面があります。太郎助は、水口の駅で名物の鰻汁を食べる際に、「余り途中の興なき儘、戯れに」、「酒飯思ふ儘にたうべて、いざとて価をも払はず出行けるに、一人も知る者なし」という術を同行している太郎助という男に見せ、不思議がる大太郎に対し、「是、我術也。仮令、百千の人の中に居ても、我姿をみる者なし」と解説します。五右衛門にもあった、人に見つからないという技ですが、術者自身が「忍び隠れる」というよりも、対象となる相手に自分の姿を感じさせないというような技になっています。それにしても、「戯れ」すなわち悪戯のような感覚でとはいえ、忍術を無銭飲食、俗な言い方をすれば「食い逃げ」に使用するのは！

実は、忍術を無銭飲食に使用する例では、他にも読本『蛭狩宇治奇聞』（五島清通作、文化十年（一八一三）刊）に同様のことがあります。こちらには悪人がたまたま術を授かり、その最初の実験として使用するのですが、術が大変な修行の後にやっと習得したものであるなら、こんな軽い使用はしないのかもしれないね。

もう一つ読本からおもしろい例をご紹介します。栗杖亭鬼卯作『夕霧書替文章』（文化十三年（一八一六）刊）という読本には、相撲取で忍術を使うという設定の人物が登場します。三上山百々右衛門という男なのですが、悪人に仕え、悪事に加担します。まずは、その百々右衛門の紹介場面から。

荒五郎、元来角力を好み力者を抱おきけるが、江州甲賀郡の産にて、三上山百々右衛門といへる六尺有余の角力取を抱おきける。是は甲賀忍の家より出て忍術も達し、角力は日本に隠なき力者にぞありける。

相撲取というと大きな体で力持ちというイメージが強く、身軽で敏捷な忍者とは相反するようですが、

この百々右衛門はどのような忍術を使うのでしょうか。百々右衛門は、桜井中納言家が天皇より預かる三十六歌仙の色紙を盗めという指令を受けます。

頃は水無月初つかた、かの色紙虫干をなし給ふにも自是を守り、無怠慢おわしけるが、最早黄昏頃なれば、悉改、三十六葉を一ツにし、箱に納給ふ所に、いづくより来りけん、七尺計の真黒なる者、庭の植込よりのさのさと座敷に上り、彼色紙の箱を奪ひ取、又庭のかたへ行んとす。中納言殿大に驚き、

「こは曲者。逃すまじ」

と、傍なる太刀を引抜給へども、疝癰にて速に立給ふ事叶はず、漸其太刀を投付給ふ。肩先にはたとあたり鮮血流るといへども、見返りもせず何国へやきへ失けり。中納言殿、

「一大事ぞ。物ども来れ」

と宣へば、お次に扣へし近習、折節右京之進も詰合ければ、早速馳付此体を見て、上を下へとかへしけり。心ききたる右京之進、追取刀にて裏門へ馳行ば、はや半町計先へ六尺余の男かけ行。

「是なん曲者ならん」

と電光のごとく追行ば、形は消て跡なくなりけり。

どこから侵入してきたのかわかりませんが、いつの間にか庭の植込込みより現れました。最初に登場した時には、「六尺有余（一八〇センチ以上）」の」と表現された百々右衛門ですが、ここではさらに大きく「七尺計（二一〇センチ程度）」と表現されています。これが、単なる作者の誤りあるいは筆のすべりなのか、あるいは、術を使っているため、より大きく見えているのかはわかりません。大きければ隠れるのには不都合でしょうが、この場合、見られることを気にしていない様子で、「のさのさと」座敷に上がっています。相撲取りの巨体が動いているイメージですね。中納言はたまたま持病の疝癰のため立ち上がれませんでした。百々右衛門の様子から考えれば、たとえ動いても問題なかったのでしょう。投げつけられた刀に傷は受けたものの、その場で消え失せてしまいます。右京之進が裏門より外に出てみると、既に半町（約五〇メートル）も先へ「六尺余の男」の姿が見えます。「七尺計」から、

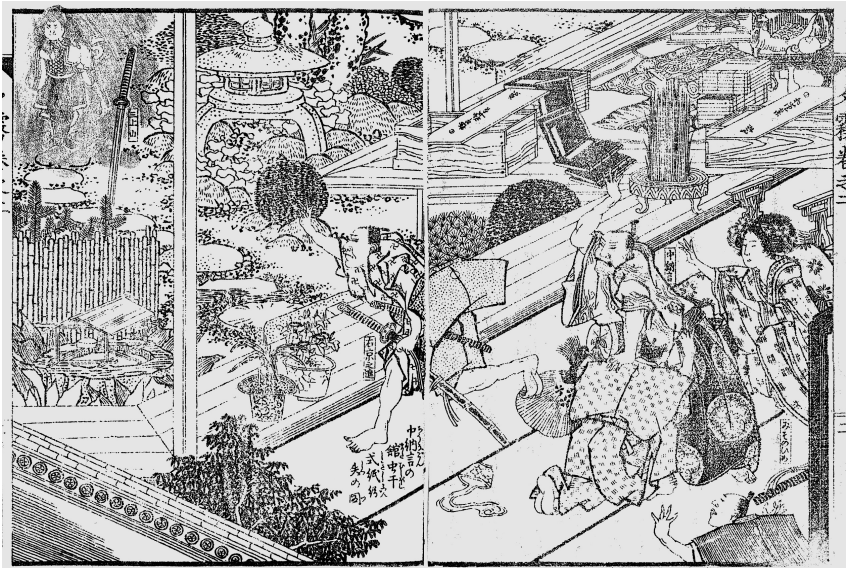


図2 『夕霧書替文章』挿絵 左上隅に百々右衛門の姿

本来の「六尺余」に戻っていますね。しかし、かなりのスピードで移動しているようです。右京の進も追いかけますが、またしても消え失せてしまいました。こうしてみると、百々右衛門の使った忍術というのは、瞬間的に姿を消したり、通常よりもやや早く移動するというものだったのでしよう。体術で早く動くわけではありません。また、長時間姿を消しているわけでもありません。あくまでも「術」でのものです。大きな体の相撲取にして忍術を使うという、現代では信じられない設定ですが、当時の読者には案外すんなり受け入れられたのかもしれない。

Ⅲ 通俗軍書の中の忍者

通俗軍書というのは、実録の一種なのですが、ここではあえて別項にしてみました。歴史性が強く、よりリアリティが求められるからです。まずは、江戸時代中期に成立した『審訓清正実記』の中から、「忍び」という語が出てくる場面を簡単に紹介(注)します。

備中冠山城を攻める秀吉軍。城から物音が聞こえ

てこないのを怪しみ、秀吉は「伊賀の忍びの者に命じて城の四方を見廻らせ」ます。「伊賀の忍び」が、秀吉の命を受けて様子を探るのです。この後、加藤清正も伊賀の忍びと一緒に見まわり、そのまま城に乗り込もうとする場面が続きます。

この場合の「忍び」の役割は、敵の様子を探る、すなわち斥候なのでしよう。敵から目立たないことはもちろん大事ですが、敵の情報を収集して帰ってくるのが求められているのです。

なお、この『審訓清正実記』には「猿飛仁助」という男が登場します。忍者ではなく、野武士としてです。朝倉攻めの最中、浅井一族が朝倉の味方をするようになったので、退却をする織田軍。そのしんがりをつとめた秀吉の軍を、猿飛仁助の率いる山賊が襲おうとするのです。結局、秀吉に仕えている蜂須賀彦右衛門、その郎等の日比六大夫らが、以前は猿飛らと仲間であったため、これを機会に猿飛は配下の三千人とともに秀吉の配下となるのです。野武士・山賊としての猿飛仁助。もしかするとこれが、真田十勇士としての猿飛佐助のルーツなのかもしれません。

しかし、実は猿飛佐助の名は、既に別の文献に登

場してはいます。やはり江戸中期には成立していた『厭蝕太平楽記』では、猿飛佐助は真田家の家臣であり、昌幸、幸村の出た上田城に残るといふ役割を担う人物として描かれます（注）。もちろん忍者ではありません。『厭蝕太平楽記』では、霧隠才蔵の方が先に忍者としての描かれ方で登場しています。徳川方の間者・小幡勘兵衛との関係も含めて、才蔵の登場する場面を見ましましょう。

小幡勘兵衛は、宇治に住む木戸喜助に「忍び組」を二十人余り遣わし、京都に火をかけることを進言します。

幸村は、

「此謀、大によし。大によし」

と悦んで、則、しのび組の内、廿人を撰みて小

幡が組に入て、宇治の木戸喜助方へ遣はし

て、其日は評定止て皆々下城なり。

幸村は屋敷に帰りて、右の趣、臣等に物がたりして、

「小幡勘兵衛は、関東の間者と存候まま、わざ

と渠に申付て、一味の者を釣出さんと存じて、宇治への忍び組を遣はしたり」

と申せば、皆々大に悦び、

「扱々、始ての会席、御心付の段、驚き入。必ず油断なく万事に心を付給へ。此者にて大かたは城内のまぎれものは知れ申べし」

とて、君臣密談終りて、幸村は部屋に入、いよいよ軍慮に胸を痛め、書をよみ、灯をかかげんとするに、其夜四つ時なり。忽ち垣を越へて来るもの有。幸村うかがひて、「何者なるぞ」と見るに、先年久度山にて助けられたる浅野が忍びの者、霧隠なり。幸村とふて曰、

「汝は何ゆへに此所へ来るぞ」

霧隠が曰、

「先年、匹夫を助け玉ひし御恩を報ぜん為也」

幸村は勘兵衛が間者であることを十分承知しながら、あえて勘兵衛の進言を評価し、そのとおり「忍び組」の中の二十人を宇治へ遣わしました。「忍び組」というものが存在して、それは隠密行動をして、この場合ですと京都に放火する役割を与えられています。勘兵衛はあくまでも「間者」であり、また勘兵衛以外にも実は徳川方の者が、大坂城内にいますが、これは「まぎれもの」と呼ばれており、忍び

の者ではありません。はつきり区別されています。

そして、幸村のもとに忍んで来たのが、「浅野が忍びの者」としての霧隠でした。霧隠は、以前幸村に命を助けられた恩返しに、勘兵衛が間者である証拠を集め、幸村に渡しに来たのでした。残念ながら、幸村がどのように霧隠の命を救ったのか、その時のエピソードはいっさい描かれておりません。結局、霧隠が集めた証拠をもとに、幸村は勘兵衛その他、城中に入り込んでいる敵の間者を一掃します。この証拠は、霧隠が勘兵衛らの身辺を探り、書簡や札を盗み出してきたものでした。「忍び組」のものに比べ、霧隠は秘かに相手のもとへ忍んでいき、しかも盗み出すことをなしえるという意味で、はるかに技量の高い忍びだと言えましょう。名前の「霧隠」もそうしたイメージがあり、何よりカッコいいですよ。

『厭蝕太平楽記』に登場する真田の家臣、三好清海入道、伊三入道、根津甚八、望月主水らと共に、猿飛、霧隠は、後に真田十勇士として位置づけられるようになります。真田十勇士の中では、猿飛、霧隠は忍術の名人となっています。参考までに、立川文庫第四十編『猿飛佐助』（大正五年（一九一六）刊）から、その忍者ぶりを見てみましょう。（註）

戸沢白雲齋に修行を受けた鷲塚佐助は、真田幸村に仕えることとなり、猿飛佐助の名を貰いました。真田家を裏切り、平賀家を頼った伊勢崎一族に対し、同士討ちをさせようと佐助は平賀家に忍び込み、まずは若侍たちを争わせませす。

佐「…ヨシこ奴を喧嘩さしてやろう」と、口にか何か呪文を唱え、ヤツと気合を掛けると、佐助の姿はパツと消えた。佐「これでよしよし……」と、ノコノコ三人の側に近寄り、一本の爛徳利を取って、口呑みにグイグイ呑み干し、肴を摘んでムシヤムシヤ喰い始めた。スルト一人の武士は、佐助の呑んだ爛徳利を取って、松「ナナ内藤氏やり給え。我が君からの振る舞い酒、遠慮を召さるな、サア酌ごう」
松山平五郎がスツと酌と、此は如何に、一滴もない。
松「オヤツ、この徳利は今持つて来たばかりだが……ハハア林氏、冗談じゃないよ、貴公独りが静かにやっておると思えば、皆呑んで仕舞って……」
林「オイオイ、乃公は知らないよ……オヤツ乃

公の肴は誰が喰ったのだ、一切れもないぞ」
内「ハツハハハ、林が極まりが悪いと思つて……誰が喰うものか、自分が今喰つていたじゃアないか」と、互いに争っている間に佐助は爛瓶の酒を悉く呑み干し、肴を一々喰つて終い、ブイと立って衝立の側で見ていると、三人は面に青筋を立て、内「これ見ろ、今まで乃公の前にあつた肴がなくなった。松山が喰つたのだらう」
松「怪しからん、乃公の分まで貴様が喰いながら、反対に何を吐かす。オヤオヤ爛瓶の酒もないぞ、ハテ不思議なことじゃ」と、三人が顔見合せていると、佐助は背後より、鉄扇で松山平五郎の頭をパンと打つ。松「痛ツ、貴様等二人は何の遺恨があつて、乃公の頭を殴る」
内「オヤ、可笑しなことを言うな、我々がどうして貴様の頭を……ワア痛いッ、コリヤ林、鬢をグイグイ引つ張るといふことが……」
林「ハハハハ二人は宛で狐に摘まれておるようだ、オヤツ誰だい乃公の鼻を摘むのは……」
果ては三人立ち上がり、掴み合いをおつ始めた。

佐助は「呪文を唱え」、気合いを入れることで姿を消しました。飲食をしている三人には、すぐ近くにいる佐助の姿が見えません。身を隠している、忍んでいるというのではなく、相手から見えなくなるということですから、かなり妖術めいたものになっています。

立川文庫『猿飛佐助』では、佐助は、伊賀名張の百地三太夫から忍術を習った石川五右衛門と術比べをします。五右衛門が鼠に変じると、佐助は猫に、五右衛門が火遁を使えば、佐助は水遁といった具合に進み、結果、佐助の勝利となります。同じく百地三太夫の弟子である霧隠才蔵もまた佐助と術比べをして敗れ、二人とも佐助と義兄弟になるのです。消えるだけではなく、変身の術など、読本で見た究極の術が、いとも簡単に行われております。

まとめ

いかがでしたでしょうか。実は、江戸時代の文学作品には「忍者」という語は使われていませんでした。忍術、忍びの術を得た者なのです。では、こ

うした忍術を習得した者たちはどのように描かれていましたでしょうか。

仮名草子、浮世草子の中では、幻術系で盗みを得意とし、武家への奉公を望むも、結局は邪道として扱われ奉公が叶わないというものでした。実録、読本の中では、やはり盗みに忍術を使い、あるいはその身を忍ぶ（隠す）ことができるという性質から、密通のためにそれが使われることもありました。基本的には体術としての隠身なのですが、中には陽炎の術のような非現実的な究極の術も描かれています。しかし、やはり邪道として扱われることも多かったのです。

一方、通俗軍書の中の忍びは戦の地での斥候（情報収集）の役を担うという、非常に現実的なものでした。歴史を描くという姿勢の強い通俗軍書だからでしょう。もともと『厭蝕太平楽記』の霧隠のように、技量の優れた者は対象となる人間の身边に忍び、盗み取ってくることも可能でした。

参考として挙げた立川文庫『猿飛佐助』になると、かなり現実離れた術が頻発しますが、これも本文中で参考としてご紹介した歌舞伎『艶競石川染』に近いものがあります。舞台の上で見せる、派手な術、

これは忍術ではなく妖術と言っても良いものでしょう。この歌舞伎の中の忍術は、草双紙の中の合巻というジャンルにも受け継がれ、それが『立川文庫』の中の忍者像に繋がっていったのかもしれない。

もう一つ、お気づきかもしれませんが、忍者者同士が幻術系の業を見せ合って戦うことはありますが、武術に近い忍術として戦うことはありません。手裏剣を飛ばしあったり、火薬を用いて爆破するなどということはなかったのです。

現代の我々は、現代に見た様々な忍者像より、それぞれの忍者のイメージを作り上げています。しかし、それは歴史を遡っていくと必ずしも一致はしていませんでした。だからこそ、そうしたイメージの変遷を追ってみるのがおもしろいのかもしれません。

注

(1) 新日本古典文学大系『伽婢子』(二〇〇一年、

岩波書店)より引用または梗概紹介。なお、

引用に際しては、踊り字を開く、振り仮名の

一部を省略するなどの改変を行った。また、

「忍び」など重要語句を太字にし、その内容

を示す記述に波線を付すした。以下、引用の際は全て同様。

(2) 対訳西鶴全集9『新可笑記』(一九七六年、明治書院)より。

(3) 菊池庸介『近世実録の研究―成長と展開―』(二〇〇八年、汲古書院)より。なお、この翻刻の底本は国文学研究資料館蔵本。

(4) 日本戯曲全集第三巻『石川五右衛門狂言集』(一九三一年、春陽堂)より。

(5) 岐阜県立図書館蔵本(国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムからのリーダープリント複写物)より。

(6) 『翻刻「夕霧書替文章」』(大西華織翻刻、藤沢毅編集、二〇一一年、尾道大学)より。なお、この翻刻の底本は名古屋市蓬左文庫蔵本。

(7) 拙稿「翻刻『審訓清正実記』(一)〜(四)」(『尾道大学芸術文化学部紀要』8〜11(二〇〇九年三月〜二〇一二年三月)。なお、この翻刻の底本は、八戸市立図書館蔵南部家旧蔵本。

(8) 拙稿「翻刻『厭蝕太平楽記』」(『近世実録翻刻集』二〇一三年三月、近世実録翻刻集刊行会)。なお、この翻刻の底本は横山邦治氏蔵本。

(9) 復刻立川文庫傑作選『猿飛佐助』(一九七四年、
講談社文庫)より。

補記

本稿は、二〇一二年度尾道大学芸術文化学部日本文学科、第3回「文学談話会」(二〇一二年六月七日)において、お話ししたものをもとにまとめたものです。席上、さまざまご意見を頂戴いたしました。感謝申し上げます。それにしても、その時ご出席してくださった皆様、本当に忍者がお好きなんだなとしみじみ観しました。